



(講談社・ブルーバックス)は南部が一般向きに本気で書いた本で、最良の手引きです。ただし、一見平明ですが、抜けも余分もない論文のような記述なので、読んだことを完全に理解しながら進む人でないと、途中で放り出すかも知れません。

そこで、一般の人にも南部さんの「すごさ」がわかるのは、インタビュ―に答えて、何気なくもらした言葉かも知れません。南部はアメリカ在住五〇年ですから、当然英語は完璧なので、「何語で考えるのですか」という質問

に對し、「だいたい数式で考えます」と答えています。また、「私は計算は、だいたい頭の中でやります」とも答えています。計算といっても勘定書の計算ではなく、理論物理の計算です。ギリシヤ文字の数式を移項したり微分したりの計算ですが、紙何枚にわたる数式が、頭の中に完全に正確に見えていなければ、出来ない計算です。紙に書いて計算するより、その方がはるかに速いし、先が見えるからでしょう。将棋の名人も同じでしょうが、常人のとても真似できない精神集中の結果と云います。

精神集中というと、沈黙、自己沈潜の人を想像しますが、仕事から見える南部の人柄は違っています。大物理学者を、自己の思考にだけ集中して一挙に真理に達する湯川秀樹タイプと、最高の武器を手に入れ、つねに最先端での計算を絶やさない朝永振一郎タイプに分けると、南部は基本的には朝永タイプです。しかし、自分の思考を確信し、大胆なことを考える点は、湯川さんの影響でしょう。

数式で考える人なので言葉による議論は好まなかった

この南部さんが意識的に日本を離れたのは、「群れることを嫌う」氣質のためでしょう。同時受賞者の益川さんが言っていますが、「南部さんの成功を囲んでみんながワイワイがやがややっている時、本人は次の所へ行っている」人です。

南部がアメリカに行く直前、大阪市立大学にいたころは、素粒子論グループの活動の絶頂期で、どう研究を進めるかの議論も盛んでしたが、南部はこれにはほとんど加わっていません。数式で考える人なので、言葉による議論は好まなかったのでしょうか。ゲルマンのクォークモデルが出たとき、素粒子論グループは哲学的観点からこれを批判、否定しましたが、南部はこれに同調しませんでした。間違える危険を恐れたのかも知れません。そこに南部さんの精神的特質もあるし、成功の原因もあると思います。